

総合的な学習の時間における「探究的な学び」と 「地域との協働」を推進する学校組織および研修体制の在り方

諸橋 利香（学校経営コース）

1 問題の所在

(1) 探究的な学習を推進するための課題

平成 29 年の学習指導要領の改訂では、探究的な学習過程の一層の重視が要点となった。社会の変化に対応できる資質・能力の育成と、探究的な学習を展開するためには学校内に閉じられた学習活動だけでは不十分であることが指摘されている。このことから、従来にも増して、生徒が探究的に学ぶ総合的な学習の時間（以下、「総合学習」に略記）は、より一層、重要であると理解した。

これまで在籍校の総合学習は、体験活動を中心にした学習活動の展開が図られており、年間を通じた学びの連続性と関係性が見えづらく、抜本的な見直しの必要性が見えてきた。そこで平成 29 年度から見直しを進め、教職員からは以下の総合学習に関わる課題が挙げられた。

【課題①】生徒に身に付けさせたい資質・能力が不明確であること。

【課題②】学校と地域社会の計画的で意図的な関わり方が不十分であること。

この2つの課題に対応するために、在籍校のある校区の人的資源、地域の特色ある活動を調査した。そこでは、地域防災士の活躍が地域の安全を守っている実際があったことから、防災教育を核にした教育課程の工夫を行っていくこととした。

平成 30 年度には【課題①】への対応として、校内研修で3年間を通して総合学習で生徒に身に付けさせたい資質・能力について話し合いを行った。同時に、小中連携の一環として中学校区の総合学習部長会を立ち上げ、学習内容の整理を行った。その後、小中合同職員研修を開催し、校区の子供の目指す姿について意見を交わす機会を設けた。そのことで【課題②】の地域社会との継続的な連携や、計画的で意図的な関わり方の工夫についても、その必要性を確認することができた。それは、地域の課題を共有する学びである。

(2) 3か年を通じた防災学習の課題

平成 30 年度入学生から本格的に開始した防災学習は、地域社会との関わりの中で、課題を共有した探究活動が、自分事となり課題解決に向かう原動力となっていることがわかった。また、教職

員は探究的な学習を進める中で、学習支援を模索しながらも、教育ビジョンや重点項目に向かって取り組んでいることが学校評価アンケートからもうかがい知ることができた。さらに、地域との協働についても肯定的に受け止め、学習の成果との関連性を実感していることが考察できた。3年間の防災学習を進めた結果、学年部の探究活動を推進していく総合学習担当者や授業者である教師自身の課題も以下のように指摘されるようになった。

【課題③】探究プロセスの理解不足による抵抗感と負担感がある。

【課題④】学年間や職員間での目指すべき目標が不明確で、新たな単元開発と地域人材との連携に意欲的に取り組むことが困難である。

令和3年度初めには、それまでの年間指導計画を、学びの連続性と学年を追った課題の発展性を可視化できるように新たに作成し教職員へ提案したが、本来的に探究の学習指導のポイントや、プロセスへの理解に躓きをもつ内容が【課題③】で挙げられた。また、教職員が経験のない学習内容であることや、長期にわたる単元計画はコーディネートを行う総合学習担当者や授業者の負担となり、ねらいや目標を見失いがちになることが【課題④】で挙げられた。このことは先述の【課題①】とも関連し、生徒の必要感や必然性、教師から見た教育的な価値を踏まえて、人やことと出会わせていく必要があることを示唆している。

(3) 本研究の目的

本研究は、総合学習の展開にあたって、在籍校に適した「探究的な学び」と「地域との協働」を推進する学校組織や、校内研修体制の在り方について防災学習を題材として取り上げ明らかにすることを目的とする。

これまでの課題を解決する取組の中で、「探究的な学び」と「地域との協働」を推進するための要件を明らかにする。

2 「探究的な学び」を推進する取組

(1) 「探究的な学び」を推進するための取組の構想

【課題③④】を解決し探究的な学びを推進していくためには、相互に「共通理解」が重要となり

必要だと考え、以下のような構想を立てた。

【課題③】に対する取組の構想

○ 教職員の探究的な学習への不安感や抵抗感を軽減するための、ガイダンスや打ち合わせの設定。

○ 学習内容とその成果など教職員の振り返りの重視。

【課題④】に対する取組の構想

○ 総合学習へ意欲的に取り組むための風土づくりと、目標や内容を共通理解することを目的とした職員研修の設定。

(2) 共通理解を図ることを目的とした取組

① 職員研修と打ち合わせの設定

令和4年度初めに【課題③】について、総合学習担当者と地域教育コーディネーターを交え、既存の年間指導計画に新年度の学年生徒の実態に合わせた探究プロセスの修正を行った。また、過去の地域社会との連携の実績を整理、提示した。総合学習担当者は、学年間で探究プロセスの連動性や確認を行ったり、講師への依頼や施設の予約について地域教育コーディネーターに質問をしたりする様子が確認できた。次に【課題④】について、総合学習全体の目的やねらい、見通しを共通理解することをねらいとして、職員研修を実施した。

② 外部の人材との打ち合わせの実施

【課題③】について、学習活動に参加、協力する外部人材と目的やねらいを共有するために、事前打ち合わせの設定を総合学習担当者や学年主任に向けて働きかけた。従来、電話やメールでのやり取りが主になっていたが、オンラインによるものや、現地へ出向き施設や設備などの確認も含めた打ち合わせなど全学年とも参加、協力者が参集しての打ち合わせが実施された。それにより、以前よりも丁寧な外部人材の学習への関わり方や、生徒の問題意識の醸成のさせ方を互いに工夫し、確認をすることができた。併せて校内でも、学年部による学習活動の検討会が随時実施され、探究的な学習を意識した改善が図られていった。

③ 教職員の振り返りの重視と評価

在籍校では、年間の中で大きな学習活動となる全校一日総合学習の取り組みが5月と7月に実施される。【課題③】について、自身の意識や取組への成果について自覚を促し、新たな学習のプランニングへの意欲に繋げることをねらいとして、それぞれWEB入力による振り返りを行い、評価することとした。また、振り返りと評価内容は地域や外部人材に示し共有を図った。

(3) 「探究的な学び」を推進するための取組の効果

① 教職員の意識と取組の変容から

先述(2)③での2回の振り返りでは、「生徒の様子から見る指導」、「教師の様子から見る準備や計画」について、肯定的評価は7月の振り返りが落ち込む結果となった。しかし、評価理由(自由記述)を比較すると、5月には生徒のマナーや安全、教職員の連携不足などの内容だったものから、7月は探究的な学習を意識した内容や、教職員の共通理解に関する内容、総合学習担当者の事前の計画などによる円滑な学習活動の成果の記述など変化が見られた。次に、「付けたい資質・能力やねらいに沿う活動」の7月の評価では、69.2%の教職員が「適切であった」と回答しており、5月よりも教職員の探究プロセスを意識した取組や具体的な働き掛けを行ったことが読み取れた。自由記述では、学習活動を想起し、現時点において生徒にどのような力が不足し、何が必要となるかを振り返り、そのためにどのような支援を行っていくべきかが記述された内容も見受けられたことから、

【課題④】に対する取組の効果があつたと考察できる。また、5月の振り返りを校内外で共有したことで、【課題③】についても、外部人材を巻き込んだ教師の意図的な働き掛けの工夫に効果が現れたと考察する。

② 地域や外部人材との目的共有と評価から

先述(2)②③の取組で、学習活動に参加、協力した外部人材の振り返りと評価の記述から、以下の内容が結果として明らかになった。

○ 対面での打ち合わせを行ったことで、学習環境や学習内容など地域や外部人材の気付きや指摘によって、教職員が活動を事前に練り上げることに繋がった。

○ これまでの地域防災士の振り返り内容は、生徒の姿に対する評価内容が中心であったのに対し、学習活動を重ねていく中で、地域防災士自身が学習への関わり方を考えた内容や、生徒の未来の期待する姿についての記述が多くなった。

(4) 「探究的な学び」を推進する要件

① 推進役のリーダーシップの重要性

探究的な学びの推進役は、生徒、教職員、外部人材と多方面でのコーディネーターが要求され、計画性や実行性も必要となる。

本研究の取組による教職員の変容では、特定の学年部については学年全体の役割を明確にして活動準備を進めている実際があつた。この学年部の総合学習担当者は令和3年度までの活動の実際と

自身の課題から、早めの計画立案と、役割分担の明確化に努めていた。総合学習部での打ち合わせを通して、自身の学年部の探究プロセスにイメージをもち、学年主任や地域教育コーディネーターとの打ち合わせを適宜行っていた。また、その内容は学年部会内で確実に伝達しながらも、学習の提案や相談も行っていた。この姿は、学年部の推進役として探究的な学習に見通しをもち、リーダーシップを発揮したものと捉えることができる。またその成果は、他教職員が安心して活動に取り組むことのできる一助となり、取組の効果として現れた。これらのことから、校長のビジョンや地域の特色を十分に理解した上で、探究的な学びに見通しをもちリーダーシップを発揮することを要件の一つとして挙げる。

② 学習過程と学習指導の共通理解の重要性

本研究の【課題③④】を解決するために共通理解を重視した。学習や生徒の姿の到達点を明らかにし教職員間、外部人材との間で共通理解を図ったことによって、学習過程のイメージを個人や学年部で練り上げ、意図した働きかけの工夫や改善に繋げている事実が効果として確認できた。特に外部人材との事前事後による打ち合わせや振り返りの共有は、地域社会と探究課題を共有しながら活動を進めていたことから、学習過程や学習指導の共通理解の重要性が極めて高いと考える。

3 「地域との協働」を推進する学校組織への取組

(1) 「地域との協働」を推進するための取組の構想

令和4年度の全校一日総合学習での教職員の振り返り記述から、地域防災士や学部講師との関わりの中で、生徒の学びの成長を実感したり、関わりを通しての次の学習活動への提言などが示されたりした。このことから、【課題④】の要因は、教師自身が地域人材とのつながりがいいことから連携の段取りや方法などが分からないことにあると推察される。そこで、【課題③】の対応とも関連し、学校課題の共有や、地域課題の共有ができる取組を行うこととした。

(2) 「地域との協働」を推進するための取組

① 地域と語る学習活動の推進

【課題③】に対応する学習活動を基本とした学校課題の共有に位置付けた取組として、令和3年6月に「これからの小針中学校の未来を語る会」と称して、学習活動に常に参加・協力している地域（防災士）住民の代表に参加してもらい、学習活動や学校への期待や願いを聞き取る場を設定した。

② 学校と地域が連携した活動の発展

先述①の「未来を語る会」において、双方の目指す方向性や願いや思いを共有したことにより、以下の3つの活動で学校と地域が連携し、地域課題や学校課題を共有しながらの活動が展開されることとなった。

- 自治会と地域防災士が企画・運営した夜間避難所訓練
- 3年生が企画・運営する合同避難訓練
- 探究的な学習へのゲストティーチャーとしての参加協力依頼

③ 「地域との協働」に向けた校内体制づくりの推進

令和4年度から実施される学校運営協議会に向けて教職員の共通理解を図る目的から、令和4年1月に管理職、事務長、教務主任が運営の中心となり職員研修を行った。この研修は総合学習から見えてきた教職員の意識に関する課題にも大きく関連し、地域との協働について教職員間で地域と協働することのよさを確認することができることにある。教職員と地域が共に協働し、責任ある関係の中で、学校の様々な問題の解決や、新たな時代を切り拓くために必要な資質、能力を育てていくことを確認した。

(3) 「地域との協働」を推進するための取組の効果

① 教職員の意識と取組の変容から

令和3年度の前後期に実施した教職員の学校評価アンケートでは、「生徒自らの問題として解決できるような支援の評価」について、「支援した」と評価した教職員は前期38%、後期40%という結果になった。また、「地域と協働しながら学習を進めた評価」について、「そう思う」と評価した教職員は前期42%、後期32%と僅かながら前期を下回る結果となった。後期の自由記述を見ると、教師自身も外部人材との関わりの中で、専門的な知見に触れ、自身の学びを深めていることへの満足している記述が多くあり、効果として評価することができる。だが一方で、先述2(3)①の自由記述内容と同様に、校内での連携や役割についての課題に触れられた記述も見受けられた。「探究的な学び」を推進するための課題と共通して、推進役や担当者には過度の負担がかからないようにするための、校内組織の体制や役割分担について、見直しや整理が必要であることが確認できる。

他の自由記述内容として、教職員の振り返りでは、特に地域との連携に深く関与した教職員ほど地域と連携した探究活動に、よさや生徒の学びや成長を実感していることが確認できた。これらの

効果は3(2)③の取組で、前年度末に「実現したい理想の学校」についてキーワードを出し語り合いを行った。以下はその内容を集約したものである(筆者による)。

実現したい理想の学校	チャレンジできる学校 安心できる学校 失敗できる学校 なりたい大人に出会う学校
そのためにどのような授業や教育活動にしたか	①生徒の長所や活躍をシェア ②わかる、できる授業づくり ③探究・学び合いを重点にした授業スタイル ④多様な学び ⑤自己伸長のための学習以外の学びの充実 ⑥人、もの、機会との出会いと多くの体験
そのためには何が必要か	・学校、家庭、地域で情報シェア ・活動場所を増やす ・地域人材、関わる大人を増やす ・企業や大人を学校に呼び込む ・行事、活動の精査 ・人との関わりを増やす活動への見直し ・職員会議で話し合いを増やし納得する ・時間、心身の健康の確保と充実

教職員間の共通の意識として、地域との連携とその連携による学び合いを重要視していることがうかがえる。

② 生徒の成長や学びの変容から

令和2年度から令和4年度までの新潟市生活・学習意識調査(新潟市教育委員会)結果について、「地域の大人との関わりと学び」を問う項目では、令和2年度の在籍校全体の肯定的評価は64.8%だった。それに対し、令和3年度は68.0%、令和4年度は74.5%と毎年、肯定的評価の高まりが見られる結果となった。この要因として、各学年主任が発行する学年便りを通して、外部人材の学習活動に対する振り返りと評価を、生徒と共有したことから、生徒は学習意欲を高め地域人材との協働した学習の中で積極的に知見を広げ思考を深めたと推察することができる。3年生の経年変化に見る確実な割合の上昇は、地域との協働する機会と外部人材の新規協力などによる関わりの拡大を図ったこと、また、授業者である教師自身が地域の願いや思いを知ったことで探究的な学習を推進することができたことによるものと考察する。しかしながら、同調査の学校独自の質問項目では、生徒自身もまた探究の難しさを感じている結果も見られた。生徒自身についても探究的な学習のサイクルの中で、意義や価値を実感できる自己評価の内容の改善を図ることが今後の課題である。

(3) 地域との協働を推進する要件

本研究の取組から、円滑な学校と地域の連携や協働には、双方が目的やねらいの他に、計画などを踏まえたゴールまでのビジョンを共有することが重要であることが分かった。それは、学校と地域が未来に向けたそれぞれの思いや願いを共有したことで、「協働」の進め方について、自分がどのような立場や役割で参画するかを考え、行動につながったことが確認できたことにある。そして、ゴールに向かうビジョンを基に学校と地域でそれぞれが工夫し、組織的に実行するためには、丁寧な関わりと情報共有の積み重ねが効果をもたらすことも確認できた。この共有のリーダーシップを担うのは、「探究的な学び」の推進する要件でも確認ができた、探究的な学びや地域連携を推進する担当者、時として学校長である。

「共有」や「協働」を図る機会とその重要性は、決して総合学習だけに限ったことではない。学校運営や組織マネジメントでは核となる取組だろう。「共有」と「協働」を行うためには、効果的な場の設定や、「共有」「協働」することの意味や目的を共に確認し、考え続けていくことが「地域との協働」を推進する要件になると考える。

4 研究のまとめ

本研究から、以下の要件が明らかとなった。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ○「探究的な学び」を推進する要件 <ul style="list-style-type: none"> ・ 推進役のリーダーシップの重要性 ・ 学習過程と学習指導の共通理解の重要性 ○「地域との協働」を推進する要件 <ul style="list-style-type: none"> ・ 明確な目的と、「共有」「協働」することの行為、またそのメリットが双方にあること。 |
|---|

本研究の目的であった、総合学習の展開にあたって、在籍校に適した「探究的な学び」と「地域との協働」を推進する学校組織や、校内研修体制の在り方についてそれぞれ要件をもって明らかにすることができた。実践研究を通して、課題に対する解決する取組と、総合学習の推進には、計画的、組織的である必要があることが改めて確認できた。そして、「探究的な学び」と「地域との協働」に対する取組みは、密接に関連し合い、どちらか一方への取組みや働き掛けでは、効果や成果に繋がらないことも考察できた。また、防災学習は、「探究的な学習」「地域との協働」のきっかけとして、また、生徒の視野を広げるために、今後もアプローチ可能であると考えている。さらなる実践と研究を積み重ね、より具体的な要件や方策を追求していきたい。